

二宮翁夜話 意識版 2012年7月

(原著：福住正兄著、佐々井海典比古訳注、現代版報徳全書8、一円融合会刊)

原著は現代においても非常に有益な書であるが、上下巻合わせて四百頁をこえる大著であるため、現代の読者、特に若者層においては読み通すことになかなか忍耐が必要になるものと思われる。尊徳の有益な思想をより広くの若者層に伝えたく、原著において特にインパクトの強い部分を採録し、文体もよりくだけた形とした。なお章だてについて、「巻」「篇」の表記を「章」に修正した。
(意識者記)

目次

第1部 尊徳仕法の原理 (天の巻 報徳の根元) p4

第1章 まっとうな人の道 (まことの大道) p4

1. 自然界の道理に学ぶ (〔一〕 まことの道 天地をもって経文とする) p4
2. 書物は氷、融かさなければ役には立たない (〔一二〕 大道は水、書籍は氷) p4
3. 書物に道なく、実行に道あり (〔一三〕 文字は道を伝える器械) p4
4. 中庸はものごとの真ん中にあるとは限らない (〔二一〕 中庸の所在) p4
5. まごころと実行なくしては事は成らず (〔二五〕 至誠と実行) p4
6. まごころは道を開く (〔二六〕 至誠は進んで行) p5
7. 経国済民 (〔二七〕 聖人の大欲) p5

第2章 天の道と人の道 (天道と人道) p5

8. 天然自然のままでは人は生きてはいけない (〔四六〕 天道の中に人道を立てる) p5
9. 欲得だけでは社会の役には立たない (〔四七〕 人道は水車の中庸) p5
10. 人は欲を自制し他人に譲ることでより良く生きられる
(〔四八〕 人道は情欲を制して成り立つ) p5
11. なぜ人は働かなければならないのか (〔五〇〕 人道は作為の継続) p6
12. 失敗の原因を他に求めてはいけない (〔五一〕 畜道は自然、人道は作為) p6
13. 私利私欲は心に生える雑草 (〔五二〕 己に克つのが人道) p6
14. まごころとは誠心誠意を尽くすということ (〔五四〕 落葉と人道) p6
15. 物事の成功は、目標の設定とその実行にある (〔五五〕 決定(けつじょう)と注意) p6
16. 自然界は人間の都合の良いようにはできていない
(〔五七〕 人道は人の立場で作為する) p6
17. 事前の準備があれば失敗はしない (〔五八〕 天変地異を予期する人道) p6
18. 努力と実行の継続が人を生かす (〔六〇〕 人為は勤めねば滅びる) p7
19. 不足不遇を嘆くより努力研鑽を積むこと (〔六一〕 人道興廢のきざし) p7
20. 人の心も田畑と同じ、耕さなければ荒廃する (〔六三〕 心田の開発) p7
21. 一喜一憂は半人前 (〔六四〕 人道は日常の衣食住に) p7
22. 仁義礼法なきは獣の道 (〔六五〕 仁義礼法は人道) p8

第2部 尊徳仕法の法則 (地の巻 報徳の法則) p8

第3章 無から有を生ずる方法 (無財から発財する勤儉の法則) p8

23. 富は節儉勉勵するものに集まる (〔九八〕 貧富の因果は明白) p8
24. 将来のために働く者は富者となる (〔一一〇〕 貧富の隔たりは心得一つ) p8
25. 目の前の小さなことをやり遂げること (〔一一四〕 積小為大) p8
26. 世の中を穏かに渡るには勤勞・儉約・讓の三つに尽きる

〔一二〇〕 処世の術は勤儉讓) p9

27. 勤儉讓は人を支える三つの柱 (〔一二一〕 勤儉讓はかなえの足) p9
28. 遅れた節約は節約にならない (〔一二四〕 先んじて節儉する) p9
29. 貯蓄は讓る行為の一つ (〔一二五〕 貯蓄は讓道の一つ) p9
30. 一厘の違いが千里の違いになる (〔一二六〕 毫厘(ごうりん)千里の差は実事) p10
31. 贅沢は自分の身に害を及ぼす (〔一二八〕 安全の道は儉素にある) p10
32. 滅亡のもとと贅沢をすることとあり (〔一二九〕 滅亡のもとと驕奢(きょうしゃ)) p10
33. まず自分の労力を讓ることから道は開ける (推讓)
〔一三一〕 まず労力を讓る (推讓) p10
34. 仁義礼智のみがき方 (〔一三四〕 仁義礼智のみがき方) p11
35. 富有の道は農工商だけ (〔一三八〕 富有の道は農工商だけ) p11
36. 不合理な努力は報いられない (〔一四七〕 難事をあとにする変通の道) p11

第4章 まず自分の分度を定めよう (生活を安定する分度の法則) p12

37. 際限なき欲望は禍のもと (〔一四八〕 知止守分 止まることを知り、分を守る) p12
38. 一家・一国の経済の基礎は収支均衡にあり (〔一四九〕 わが法は分度確立が基礎) p12
39. 自分を磨くべし (〔一五〇〕 分度を定めれば荒地・借財なし) p12
40. 与えられた機会を無駄に費やさないこと (〔一五一〕 分外の結構を分内に入れるな) p12

第5章 推讓は繁栄連鎖を復活させる (幸福を永遠にする推讓の法則) p13

41. 利を貪れば、上下ともに滅びる (〔一六三〕 四海困窮せば天禄永く終わる) p13
42. むさぼらないだけでは讓とは言えない (〔一六四〕 奪と不貪(ふどん)と讓) p13
43. 讓りの道を行わなければ安堵の地は得られず (〔一六八〕 人道の根本は讓道) p13
44. 推讓の段階 (〔一七一〕 推讓の段階) p14
45. 奪うに益なく讓るに益あり (〔一七二〕 湯ぶねの教訓) p14
46. 無尽蔵を開く大道 (〔一七三〕 無尽蔵を開く大道) p14
47. 万事、刃先を手前にせよ (〔一七四〕 万事、刃先を手前にせよ) p15
48. 相手を理解し道理にかなった対応をすること (〔一七五〕 馬は飼葉桶で治まる) p15
49. 今日の豊かさは前代の人々の推讓による
〔一七七〕 現代の文化は前代の推讓) p15

第3部 尊徳仕法の実際 (人の巻 報徳の仕法) p15

第6章 国家盛衰の根元 p15

50. 衰亡は利権の争奪から (〔一七八〕 衰亡は利権の争奪から) p15
51. 真の利益は利の少ない所にあり (〔一七九〕 真の利益は利の少ないところに) p15
52. 変事に備えること (〔一八三〕 変事に備える道) p16
53. 気風の刷新は率先巡回から (〔一八八〕 民風作興は率先回村から) p16
54. 怠惰な民も人口の減少も失政から (〔一八九〕 惰民も人口減も失政から) p16
55. 賄賂の悪弊 (〔一九〇〕 賄賂の悪弊) p16

第7章 治国の要道 p17

56. 金だけでは復興はできない (〔一九七〕 衰村復興は幹部の徳行から) p17
57. 無駄に放置・費やされているものを生かす (〔一九八〕 人の捨てざるなきもの) p17
58. まず心の荒廃を直すことから (〔二〇一〕 まず心田の荒蕪を開く) p17

59. 平常心を保って事にあたること（〔二〇二〕 安んじて後慮(おもんばかり) p18
60. 数理によって道理を悟ること（〔二〇三〕 仕法雛形は一切経） p18
61. 善行表彰と無利息金貸付による村の復興（〔二〇四〕 善行表彰と無利息金貸付） p18
62. 自力更生の覚悟が道を開く（〔二〇五〕 復興は開びやくの大道によれ） p19
63. 世話をやきすぎるな、自立を促せ（〔二一九〕 仕法も世話をやきすぎるな） p19
64. 無利息金の妙用（〔二二三〕 無利息金の妙用） p19
65. 飢民救助の実施方法（〔二三三〕 飢民救助の実施方法 天保の大飢饉） p20
66. 烏山の救急仕法（〔二三四〕 烏山の救急仕法 天保の大飢饉） p20
67. 救急と勸業の法（〔二三五〕 救急と勸業の法 天保の大飢饉） p21
68. 天保飢饉の予知と対策（〔二三八〕 天保飢饉の予知と対策 天保の大飢饉） p21
69. 飢饉時の余穀推譲（〔二三九〕 飢饉時の余穀推譲 天保の大飢饉） p22
70. 駿東郡の救急と小田原藩（〔二四〇〕 駿東郡の救急と小田原藩 天保の大飢饉） p22
71. 御厨郷の救急仕法（〔二四一〕 御厨郷の救急仕法 天保の大飢饉） p22
72. 救急の決意と食料準備（〔二四二〕 救急の決意と食料準備 天保の大飢饉） p23

あとがき p23

二宮翁夜話

「私は不幸にして十四歳のとき父に別れ、十八歳のおりに母に別れ、所有の田地は洪水のため残らず流失してしまったから、若年のころの困窮患難は実に心魂に徹し、骨髓にしみついて、今日でもなお忘れることができない。そこで何とかして世の中を救い、国を富まし、憂き瀬に沈む者を助けたく思っただけで勉強していたところ、はからずも天保の二度の飢饉に遭遇した。そこで心を砕き、身を粉にして、広くこの飢饉を救おうと努めたのだ。」(二宮翁夜話(下)73頁)

第1部 尊徳仕法の原理(天の巻 報徳の根元)

第1章 まっとうな人の道(まことの大道)

1. 自然界の道理に学ぶ ([一] まことの道 天地をもって経文とする)

めぐる四季や自然界の万物をよくよく目を見開いて見、よくよく耳をすまして聞いてみよう。日々繰り返し繰り返し示される天地の教えが見えて来、聴こえて来るだろう。これが天地の経文というものなのだ。たとえば米をまけば米がはえ、麦をまけば麦がみのるという、古来変わらぬ道理により、そのまことの道に基づいて、これを誠にするための人としての勤めをしなければならないのだ。

2. 書物は水、融かさなければ役には立たない ([一二] 大道は水、書籍は水)

書物に書かれていることは、そのままでは世の中の用に立てることは難しいだろう。世に言う「論語読みの論語知らず」ということだ。書物を読んだだけで理解したとは言えない。本当に理解し自分のものにするためには、それを実行してみることが必要なのだ。そうして初めてこの書物が世の中の役に立てられるようになるのだ。書物は凍った水のようなもので、これを融かすには人の情熱という温気と実行が必要なのだ。融かされた水は世の中を潤沢に潤し有用なものとなるだろう。

また書物は経書といい、その「経」という字は、もともと機(はた)の縦糸のことなのだ。だから縦糸ばかりでは用をなさず、横に日々実行を織り込んで、はじめて織物として役に立つのだ。

3. 書物に道なく、実行に道あり ([一三] 文字は道を伝える器械)

真理は、文字の上にあると思うのは間違いである。文字は道を伝える道具であって、道そのものではない。書物を読んだだけで道を得たと思うのは間違いである。道は、書物そのものにあるのではなく、それを実行するところにあるのだ。

4. 中庸はものごとの真ん中にあるとは限らない ([二一] 中庸の所在)

聖人は「中」を尊ぶと言いが、その「中」というものは、ものによってそれぞれその所在が違って、いる。物差しのようにものの真ん中に「中」があるものもあり、竿秤の重りの位置のように、片寄った所に「中」があるものもある。泥棒仲間では上手な盗み方をほめ、盗まれる方は盗むことをとがめるが、どちらも「中」ではない。本当の「中」は、盗まないこと、盗まれないようにすることにある。

5. まごころと実行なくして事は成らず ([二五] 至誠と実行)

才知や弁舌が上手だといってもそれだけでは価値がない。人には説くことができても、鳥獸・草木を説くことはできない。まことを尽くす心と実行は、うりでもなすでも蘭でも菊でも、みんな繁栄させることができるのだ。敵を欺く弁舌があっても、弁舌をふるって草木を茂らすことはできないだろう。だから才知・弁舌を尊ばずに、至誠と実行を尊ぶのだ。

およそ世の中は、知恵があっても学があっても、至誠と実行とでなければ事は成就できないということを知っておくべきだろう。

6. まごころは道を開く〔二六〕至誠は進んで行く)

誠を尽くすこととは、注文の内容には含まれていないが、相手の気持ちを汲み取って相手が喜ぶだろうと思われるものを加えるというような行為のことである。菊の花を贈るのは注文で、注文にはなくとも根をつけて進呈することには真心が込められている。万事、このように真心を込めれば、志が貫けないことも、仕事が成就しないことも、ありえないだろう。

7. 経国済民〔二七〕聖人の大欲)

大欲とは、万民の衣食住を充足させ、人々の身に大きな幸福を集めようと欲することだ。その方法とは、国を開発し、物を開発し、国家を治め、庶民を救済することに他ならない。

経済とは、そもそも経国済民(経世済民)の略であり、国家を治め民を救済することを意味する言葉である。自己保身と利益の追求に血道をあげることは経済とはいわない。経済界と政治の世界のどこに国家を治め国民を救済する意思と行動があるのだろうか。

第2章 天の道と人の道 (天道と人道)

8. 天然自然のままでは人は生きてはいけない〔四六〕天道の中に人道を立てる)

人はみな裸で生まれたのだから、家や衣服がなければ天露や寒暑をしのぐことができない。そこで人道というものを立てて、米を作ることを善とし、雑草を悪とし、家を造るのを善とし壊すことを悪とした。これらは皆ひとのために立てた道だから人道というのだ。一方天道からみれば善とか悪というものはない。その証拠に、自然界のなりゆきにまかせれば田畑もみんな荒地となって天然自然の状態に戻ってしまう。なぜならそれが天理自然の道だからだ。

天には善悪がない。それゆえ稲も雑草も差別せずに、命あるものは皆成育させる。人道は、その天理に従いながらも、その内でそれぞれ人にとって有用・便利かどうかを区別して、ひえや雑草を悪とし、米麦を善とする。人道はともすれば破れようとする。それゆえ、政治を行ったり、教育をしたり、刑罰法制を定めたり、礼法を設けたり、やかましくうるさく世話をやいて、ようやく人道は立つのだ。それなのに、人間としての努力実行をせずに招いたみじめな結果を天理自然の道と思うのは大きな間違いだ。

9. 欲得だけでは社会の役には立たない〔四七〕人道は水車の中庸)

天道に従うだけでは人は生きていけないし、私利私欲一辺倒の人道だけでは社会の役には立たない。天の理に従って種をまき、天の理に逆らって草をとり、欲に従って家業に励み、欲を制して社会へ実りを返す義務があることを知るべきだ。

人道とは天の理と人の欲の二つの力でバランスをとりながら回転する水車のようなものなのだ。バランスが崩れれば人は生きていくことができないだろう。バランスとは論語でいうところの中庸のことである。

10. 人は欲を自制し他人に譲ることでより良く生きられる〔四八〕人道は情欲を制して成り立つ)

誰しも、人は旨いものを食べ、いい着物を着たいと思うのが自然の欲求であるけれども、その気持ちを少し我慢し、自分の収入の限度をわきまえて出費をその分限以下に抑えるべきだろう。好きな酒を控え、安逸な暮らしを戒め、美食美服を押さえ、その結果生み出された余剰を他人にも譲り、将来にも譲らなければならない。それが人道というものだ。

11. なぜ人は働かなければならないのか ([五〇] 人道は作為の継続)

天道とは自然現象そのものことだ。人道とは人の作為によって作られた道だ。天然自然にまかせておけば、堤は崩れ、川は埋まり、橋は朽ち、家は立ち腐れとなる。人道はこれに反して、堤を築き、川をさらえ、橋を修理し、屋根をふいて雨の漏らぬようにするのだ。人における行いも同様であって、寝たければ寝、遊びたければ遊び、食いたければ食い、飲みたければ飲むというのは天道であって、そのようなことばかりでは人は滅びる。眠たいのを努めて働き、遊びたいのを励まして戒め、食いたい美食をこらえ、飲みたい酒を控えて明日のために物をたくわえる、これが人道であり、人が生き抜くために必要なことなのだ。

12. 失敗の原因を他に求めてはいけない ([五一] 畜道は自然、人道は作為)

自然の道は古来廃れることはないが、人為の道は怠けてしまえば廃れてしまう。自分が怠けたことを度外視して、失敗しても仕方なかったなどと失敗の原因を天理自然の性にしてしまうのは、天道と人道は違うものだと気づいていないからだ。

13. 私利私欲は心に生える雑草 ([五二] 己に克つのが人道)

「己」の心に生じる私利私欲は、心という田に生える雑草のようなものだ。己の心を豊かにしたかったら、この雑草をこまめに取り除くことだ。これが人道であり、「己に克つ」ということなのだ。

14. まごころとは誠心誠意を尽くすということ ([五四] 落葉と人道)

たとえ相手がばかでも悪人でも、人の道は教え続けなければならない。教えて言うことを聞かなくても、怒ったりいらいらしてはいけない。繰り返し、繰り返し教え続けることが人道を尽くすことであり誠意を尽くすということである。

15. 物事の成功は、目標の設定とその実行にある ([五五] 決定(けつじょう)と注意)

すべて物事を成就するためには、目標を定め、そのための行動に注意を払うことが必要である。たとえ小さなことといっても目標も決めず注意も払わなければ必ず失敗するだろう。

16. 自然界は人間の都合の良いようにはできていない ([五七] 人道は人の立場で作為する)

世の中で、役に立つ材木はみんな四角だけれど、天は四角な木を生やさない。また皮も骨もないような、かまぼこか、はんぺんのような魚があれば、人のために便利だろうけれども、天はそのような魚を生じない。自然界は人間の都合のよいようにはできていないものだ。こういうことから、天道と人道は異なるという道理を悟ったほうがいい。この道理をはっきりわきまえないと、私の言う人道を理解することも実行することも難しいだろう。

17. 事前の準備があれば失敗はしない ([五八] 天変地異を予期する人道)

大きく困難な仕事は、ある程度実地に取り掛かってさえ容易にその成否の判断は難しい。まして設計図の上だけでは、なおさら成否の判断は難しい。難事業を計画する場合は、万一失敗があった場合の対処方法(コンティンジェンシー・プラン)を事前に用意したり、またどのような異変にあっても失敗しないだけの工夫(リスク回避策)を考えておく必要がある。たとえ天変はなくても、必ず思わぬことが起きるものだ。古語にも「物事は、事前の準備があれば失敗はしない」とある。

「およそどんな事でも事前に準備をしていれぼうまくいき、事前の準備がなければ失敗するものだ。言いたいことも事前にはっきりさせておけば話の最中につまずくこともなく、目標も事前に決めておけばくるしむこともなく、やるべき事も事前に決めておけば気掛かりもなく、進むべき道もきめておけば行き詰まることもないだろう。」(中庸)

***もの事を成功させるために必要なこと(意識者注記)**

- ・事前の準備を行うこと
- ・事前に伝えるべきことを明らかにしておくこと
- ・事前に実行すべきことを決めておくこと。
- ・事前に行動方針を決めておくこと。
- ・事前に進むべき行程を決めておくこと。
- ・計画通りに進まない場合の代替計画(コンティンジェンシー・プラン)を用意しておくこと。
- ・あらかじめ予測される異変(リスク)を回避する対策を用意しておくこと。

18. 努力と実行の継続が人を生かす ([六〇] 人為は勤めねば滅びる)

今日、家や蔵を建て並べて人も多く住んで、にぎやかに繁盛していても、一たん間違えばこれらの財産も一代かぎりとなって、子や孫の代には破れた屋敷ばかりが残るようになることもあるものだ。実に恐ろしいことで用心しなければならない。すべて人が作ったものは、何か変事がおこり人がそれを維持することを継続しなくなったら、みんな滅びてしまい、残るものは草木がぼうぼうと生い茂る原野だけとなるだろう。

*「夏草やつわものどもが夢の跡」(芭蕉)

19. 不足不遇を嘆くより努力研鑽を積むこと ([六一] 人道興廢のきざし)

われわれが生きるこの世界は常に変化しているから、時勢に合うものは勢いを増し、時勢に合わないものは衰退していくのは天然自然の理であろう。東に向いていれば午前は日を受けるが、午後には陰りとなり、西に向いていれば午前は陰りとなっても、午後には日を受ける。人生も同じことが言えるだろう。このような道理を知らず、自分の不運を嘆くのは誤りであろう。

今ここに何億何兆円の借財があっても、荒廃した市場ばかりしかもってなかったとしても、知恵ある人々がこの人道による努力行動を極めれば何も憂えることはないのだ。逆に、何億何兆円の蓄財があり、繁栄する市場をもっていたとしても、愚かにも人道を怠り、これも足りないあれも足りない、贅沢慢心の心で、増長に増長を加えてゆけば、さしもの財宝も秋の葉が嵐に散乱するように、消滅してしまうのだ。

20. 人の心も田畑と同じ、耕さなければ荒廃する ([六三] 心田の開発)

人の心も田畑と同じで、何もせず放置しておけば雑草がはびこるだけの荒地となるだろう。人の心が荒廃すれば、同時に実際の田畑も職場も荒廃するだろう。世の中の豊かさが人々の心の豊かさをもたらすのではなく、人々の心の豊かさが世の中の豊かさをもたらすのである。まず人々の心の田の荒廃を開拓することから始めなければならないだろう。天から授かった善い種、すなわち仁義礼智というものを培養して、この善種を収穫して、又まき返しまき返して、国家に善種を蒔き広めることだ。一人の心の荒蕪が開けたならば、土地の荒蕪は何万町歩あろうと心配することはないのだ。

21. 一喜一憂は半人前 ([六四] 人道は日常の衣食住に)

大もうけする者があれば大損する者がいる。悲しむ者があれば喜ぶものがある。苦楽・存亡・榮辱・得失、どれをとっても、こちらが増せばあちらが減る道理以外のものではない。このように、己のことばかりにかまけて他人のことを省みないような一喜一憂するような仕事は半人前の適当な仕事なのだ。そもそも自分という大元を考えてみると「食うこと」と「着ること」にたどりつく。この人間世界においては、政治や種々の教えや法も結局、みなこの二つの安全を図るために他ならないのであって、その他のことは枝葉末節に過ぎないことが分かる。

22. 仁義礼法なきは獣の道〔六五〕仁義礼法は人道)

山畑にあわやひえが実ると、猪や鹿や鳥たちが出てきて、これを取って食べる。礼儀も作法もなく、仁も義もなく、てんで勝手に自分の腹を満たすばかりだ。あわを育てようと肥やしをやる鳥獣もなく、ひえを実らせようと草をとる鳥もいないのだ。人間でも仁義も礼法もなければ鳥獣と同じになってしまうのだ。

* 意識者注.

「仁義礼智信」とは、儒教における、人が行うべき道、すなわち道德の基本理念である五つの徳。

「徳」とは、道理をさとって行為にあらわすこと。他人を敬服させる人格の力。

「仁」とは、人を思いやること。博愛の精神。孔子は仁を最高の徳目としていた。

「義」とは、利欲に囚われず、なすべきことをすること。(語源的には宜に通じる)

「礼」とは、仁を具体的な行動として、表したもの。人間の上下関係で守るべきことを意味する。もともとは宗教儀礼でのタブーや伝統的な習慣・制度を意味していた。

「智」とは、学問に励み、ものごとの本質・真実を見抜く力のこと。

「信」とは、言明をたがえないこと。真実を告げること。約束を守ること。誠実であること。

第2部 尊徳仕法の法則(地の巻 報徳の法則)

第3章 無から有を生ずる方法 (無財から発財する勤儉の法則)

23. 富は節儉勉勵するものに集まる〔九八〕貧富の因果は明白)

貧となり富となるのは偶然ではない。富にもよってきたる原因があり、貧にもよってきたる原因がある。ひとはみんな、財貨は富者のところに集まると思っているが、そうではない、節儉なところと、勉勵するところに集まるのだ。百円の身代の者が百円で暮らすときは、富の来ることなく貧の来ることもない。百円の身代を八十円で暮らし、七十円で暮らすときは、富がそこに来、財がそこに集まる。百円の身代を百二十円で暮らし、百三十円で暮らすときは、貧がそこに来、財がそこを去る。ただ分外に進むか、分内に退くかの違いだけだ。

24. 将来のために働く者は富者となる〔一一〇〕貧富の隔たりは心得一つ)

富と貧とは元来遠く隔たったものではない。ほんの少しの隔たりであって、その本源はただ一つの心得にあるのだ。貧者は昨日のために今日勤め、昨年のために今年勤める。それゆえ終身苦んでもそのかいがない。富者は明日のために今日勤め、来年のために今年勤めるから、安楽自在で、することなすことみな成就する。それを世間の人は、今日飲む酒がないときは借りて飲む。今日食う米がなければ、又借りて食う。これが貧窮に陥る原因なのだ。

25. 目前の小さなことをやり遂げること〔一一四〕積小為大)

大きな事を成し遂げたいと思うなら、まず小さな事をきちんとやり遂げなければいけない。小さいものが積って大きなものになるからだ。愚かな人の常として、大きな事ばかりを望んで小さなことをなおざりにし、できもしない事に気をつかい、目の前にあるやるべきことをやろうとしない。だからいつまでたっても大きな事を成し遂げられないのだ。それは、大は小の積み重ねでしか大になることの道理を知らないからだ。たとえば百万石の米といっても米の粒が大きいわけではない。一万町歩の田を耕すのも、一くわずつ耕すところから始まる。千里の道も一歩ずつ歩いてたどりつけるのだし、山を作るにも一もつこの土を重ねてゆくのだ。この道理をはっきりわきまえて、一生懸命小さなこ

とに努力をしてゆけば、大きな事は必ずできあがる。小さな事をいい加減にするものは、大きな事は決してできないものだ。

注 米一石=10斗=100升=150kg、1町=10反=3000坪=3.3㎡×3000=9900㎡

26. 世の中を穩かに渡るには勤勞・儉約・讓の三つに尽きる（〔一二〇〕 処世の術は勤儉讓）

世間一般に金持になりたい樂をしたいとか貧乏は嫌だとか苦しいのは嫌だとか、いろいろかしましいが、世の中は大海のようなものだから波の上で浮き沈みがあるのは仕方がないことだ。ただ水を泳ぐ術が上手か下手かの違いだ。船にとっては便利な水も、人がおぼれ死ぬ水も、水に変わりはない。時節によって吹く風も順風だったり逆風にもなったりする。海も荒い時があり、穩かな時もあるということだけの事だ。だからおぼれて死なないようにするには、泳ぎの術が必要であるように、世の海を穩かに渡る術は、勤勞と儉約と讓の三つに尽きる。

27. 勤儉讓は人を支える三つの柱（〔一二一〕 勤儉讓はかなえの足）

勤すなわち勤勞とは、衣食住になるべきものを働いて作り出すことを言う。儉すなわち儉約とは、作り出した物をむやみに消費しないことを言う。讓とは、衣食住に必要なものを他に讓ることを言う。この讓には、色々ある。今年産出したものを来年のために蓄えるのも讓だ。それから子孫に讓ること、親戚友人に讓ること、郷里に讓ること、国家に讓ることなどがある。人それぞれの身の程に応じて可能な限り行うべきだ。たとえかせぎの少ない雇用者でも、今年の物を来年に讓ることと、子孫に讓ることは、必ず努力した方がよい。

この勤儉讓の三つは、鼎(かなえ)の三本足のようなもので、人を支える大切なものであり、一つでも欠けてはいけないものだ。必ず三つ共に行わなければならない。

28. 遅れた節約は節約にならない（〔一二四〕 先んじて節儉する）

「先んずれば人を制し、後るれば人に制せらる(史記)」という言葉があるが、儉約も先んじなければ役に立たない。たとえば千円の収入が九百円に減って、百円分を借金して暮らすと、次の年はこの百円を返済すると、収入は八百円に減ってしまう。こうなってしまってから初めて儉約して九百円で暮らすと、また借金が百円になり、次の年には収入が七百円に減ってしまう。年々こんなことをしていくから、いくら儉約している積りになっても、労多くして功なく、ついには滅亡に陥ってしまうのだ。その時になって、自分は不運だと嘆くが、これは不運などではない。儉約が遅れたために借金に負けただけのことだ。分かれ目は、ただこの一挙、儉約が先んずるか遅れるかの違いだけである。千円の収入が九百円に減ったならば、すみやかに八百円で生活することだ。八百円に減ったなら、七百円で生活をすれば良い。このことを先んずるというのだ。

29. 貯蓄は讓る行為の一つ（〔一二五〕 貯蓄は讓道の一つ）

多く稼いで少なく使う、これが国や人を富ませる基本だ。これが豊かになる極意だ。ところが世間の人は、この儉約をけちとか強欲とか言うが、それは間違っている。なぜなら人の道はもともと自然に反して、努力することによって立つ道なのだから、当然貯蓄を尊ぶのだ。その貯蓄ということは、今年の物を来年に讓るという一つの讓る行為であるし、親の財産を子に讓るのも、貯蓄の仕方の一つなのだ。こうして見てくると、人の道は貯蓄一つで成り立つとさえ言える。だから、貯蓄や讓るという行為は国や人を富ませる大本であり極めて優れた方法である。

30. 一厘の違いが千里の違いになる（〔一二六〕 毫厘（ごうりん）千里の差は実事）

「毫厘（ごうりん）の差、千里の違い」という言葉がある。人はみんな、たとえ話し程度にしか感じていないが、二ヶ月の利子に一文の違いがあったら、百八十年目になって百四十一万九千八百九十五両永二百九十四文九分五厘の差となった。実に初めは毫厘の差であったものが、時間がたてば千里の差となってしまう。これはたとえではなく実際のことなのだ。恐るべきではないか。このことは、たとえわずかな借金でも放置しておけば破滅を招く程の借金となり、逆を言えばわずかな努力の積み重ねがいつしか大きな成果を生み出すということ（積小為大）を数字が証明しているということだ。

31. 贅沢は自分の身に害を及ぼす（〔一二八〕 安全の道は儉素にある）

あるとき、自分の身に災難が降りかかってきた時に自分の味方となるものは、「飯と汁、木綿着物」の他にはない。これは鳥獣の羽毛と同じことで、どこまでも自分の味方なのだ。この他のものは、みんな自分の敵と思った方がいい。この他のものが内に入ってくるのは、敵が内に入ってくるようなものだから、恐れて除き去るのがよい。これ位のことは、とかいいながら自ら許すところから、人は過ってしまうものだ。はじめは害がなくても、年を経る間に、思わず知らずいつか敵となって、悔いても及ばぬ場合に立ち至ることがある。こうしたものがわが身の内にないならば、暴君も汚吏も、どうすることもできない。十分に気をつけなければいけない。

32. 滅亡のもととは贅沢をすることにあり（〔一二九〕 滅亡のもととは驕奢（きょうしゃ））

どれほど豊かであっても、儉約の家法を立て、贅沢に流れることを厳禁するのがいい。贅沢は道を誤る原因であり、滅亡の元でもある。何故かと言えば、贅沢を求めるところから、利をむさぼる気分が増長して、慈善の心は薄らいでしまう。そして自然に欲が深くなってけちになってしまう。それから知らず知らずのうちに職業も不正になっていき、ついに災いを生ずるのだ。実に恐ろしいことだ。

33. まず自分の労力を譲ることから道は開ける（推譲）（〔一三一〕 まず労力を譲る（推譲）） （万策尽きてもやれることはある）

食べるものがなく空腹の時に、よそに行って、飯を食わして下さい、そうしたら庭を掃きましょう、と言っても、決して一飯をふるまう者があるはずはない。空腹をこらえてまず庭を掃いたら、あるいは一飯にありつくこともあるだろう。これが、おのれを捨てて人に従う道であって、百方手段が尽き果てた時でも、行われうる道なのだ。私が若いころ、初めて家を持ったときに、一枚のくわが破損してしまった。隣の家に行ってくわを貸して下さいといったら、隣のじいさんは、今この畑を耕して菜をまこうとするところだ、まき終わらねば貸してやれない、という。私は家に帰っても別にする仕事がないから、私がおのれを耕してあげましょうといって耕して、それから菜の種をお出しなさい、ついでに蒔いてあげましょうといって、耕した上に蒔いて、その上でくわを借りたことがある。そうしたら隣のじいさんは、くわに限らず何でもさしつかえの事があつたら、遠慮なく行って下され、必ず用だてましょう、といったことがあつた。こんな風にすれば、百事さしつかえのないものだ。

毎晩寝るひまをさいて、精を出してわらじ一足でも二足でも作る。そうしてあくる日開墾地に持って行って、わらじの切れた人、破れた人にやる。受け取って礼をいわれなくても、もともと寝るひまに作ったものだから、寝た分と思えばよい。礼をいう人があれば、それだけの徳だ。もし一銭半銭を礼にくれる者があれば、これまたそれだけの利徳だ。よくこの道理を肝に銘じて、連日怠らなければ、一家確立の志の貫かれぬ筋合いはない。何事も成就しないはずはない。私が幼少の時の努力は、これ以外になつたのだ。

34. 仁義礼智のみがき方（〔一三四〕 仁義礼智のみがき方）

人は本来、仁義礼智の心を持っており、どのように愚かなものでもこの本性がないことはないと言われている。この仁義礼智を家にたとえれば、仁は棟(むなぎ)、義は梁(はり)だ。礼は柱で、智は土台だ。家を作るにはまず土台をすえ、柱を立て、梁を組んで、それから棟をあげる。そのように、講釈だけをするには仁・義・礼・智といってもよいが、実行するには智・礼・義・仁という順序で、まず智をみがき、礼を行い、義を踏み、仁に進むのがよい。

*注 棟木とは

母屋や桁と平行に取りつけられる、屋根の一番高い位置にある部材です。「ムナギ」あるいは「ムネキ」と呼びます。

棟木を取りつけることを上棟(ジョウトウ)あるいは棟上げ(ムネアゲ)と呼び、棟木を組む(上げる)ということは、建物の骨組みを組み終わるといことで、その日に上棟式を行って、棟梁が四方を清め、工事の無事完了を祈ります。

構造的には、棟木は母屋と共に屋根の荷重を、小屋束から梁へ伝える役目を果たしています。



35. 富有の道は農工商だけ ([一三八] 富有の道は農工商だけ)

財を生み出し利益を得るのは農工の民だ。生み出された財を流通させて利益を得るのが商人だ。財を生み出し、また流通させるこれら農・工・商の仕事を行わないで富有を願うのは、ないものねだりをするようなもので知者のすべきことではない。ところが世間で知者と呼ばれる者がしていることを見ると、農・工・商を勤めずに、ただ小さな、ずるい才知をふるって財を得ようとするのが多い。誤りであり迷いであるといわねばならぬ。

36. 不合理な努力は報いられない ([一四七] 難事をあとにする変通の道)

何事にも、その場に応じた変化対応が必要な場合がある。別の言葉で言えば、目的を達成するためには多少道に外れた便宜的な手段・方法が必要な場合がある。

昔の聖人の教えでは、困難なことに先に手をつけるべきだといっている。従って世間一般では、畑に草が生い茂っている場合、最も生い茂っている所から先に除草するのが常だが、このような時に限って、草が少なくたって手軽な畑から手入れをして、草の多い所は最後にした方がいい。これは大切なことだ。非常に草が多くて手間がかかる所を先にすると、非常に時間がかかってしまい、その間に草の少ない畑もみんな一面草になってしまい、どれもこれも手遅れになってしまう。だから、草が多く手間がかかる畑は多少荒れてもしかたないと覚悟して、しばらく放っておき、草が少なく手間がかからない所から片付けた方がいいのだ。そうしないと、労力のかかる場所だけに手間取って日時を費やし、全体の田畑が順々に手入れが遅れて、大きな損になるのだ。

国家を復興するのも同じこの道理の通りであることを十分心得ておかなければならない。

また、山林を開拓する場合に、大きな木の根は一旦そのままに放置しておいて、その周りを切り開いた方がよい。そうして三、四年もたてば、木の根は自然と朽ちて、力を入れずに取り除けるのだ。これを開拓の時に一時に掘り取ろうとしても、労が多くて功が少ない。百事この通りで、村里を復興しようとするれば必ず反抗する者がある。その扱い方もこの道理と同じで、決して取り合わず、触らずに、問題にせず自分の勤めに励んだ方がよい。

第4章 まず自分の分度を定めよう（生活を安定する分度の法則）

37. 際限なき欲望は禍のもと（〔一四八〕 知止守分 止まることを知り、分を守る）

世間の人は、富や高い地位を求めて求めて際限がないが、これは俗人の陥りやすい弊害であり、そのため、かえって長くその財産や地位を保てないのだ。際限なく田畑や土地を買い集めたいと願うことは実にあさましい限りだ。それはちょうど、山の頂上に登っているのに、なお登ろうとするようなものだ。おのれが絶頂にありながら、それでも下を見ないで上ばかり見ていたら危ない話だ。絶頂にいて下を見れば、全てのものが眼下にある。眼下の者は、哀れむべきで恵むべきであるのが自然の道理だ。そういう運命をもった富者でありながら、なお己の利益ばかりを願い求めていたのでは、下の者はなおさら必死でむさぼり取らなくてはならないようになってしまう。もし上下が互いに利を争ったら、奪い合いをしなければ済まないところまで行き着いてしまうのだ。これがわざわざの起こる原因であり、実に恐るべきことだ。

38. 一家・一国の経済の基礎は収支均衡にあり（〔一四九〕 わが法は分度確立が基礎）

何事でも、それを成し遂げようと思うならば、初めに、その終わりの姿がどうあるべきかを見定めておかなければならない。たとえば木を切る場合でも、切る前に、木の倒れるところをはっきりと決めておかなければ、倒れてしまった後ではどうすることもできない。だから私が印旛沼を検分する時も、仕上げの検分までしておき、どのような異変が途中で起こっても失敗のない工夫をしたのだ。相馬侯が興国の方法を依頼された時も、着手する前に過去百八十年間の収納額を調べて、分度の基礎を立てた。それは、荒地開拓ができあがった時の用心なのだ。私の方法は、分度を定めることを本とする。この分度を確固と立てて嚴重にこれを守ってゆくなれば、荒地が何ほどあっても、借財が何ほどあっても、何の恐れも心配もない。わが富国安民の法は分度を定めること一つにあるからだ。

* 意訳者注。「分度」とは一家・一国における収支均衡点すなわち損益分岐点のことを意味する。

39. 自分を磨くべし（〔一五〇〕 分度を定めれば荒地・借財なし）

草を刈ろうとする者は、草に相談する必要はない。自分の鎌を良く研げばいい。ひげを剃ろうとする者は、ひげに相談はいらない。自分のかみそりを良く研げばいい。砥石で研いでない刃物が、しまっておいて刃がついたためしはないのだ。

のこぎりの目を立てるのは、木を切るためだ。鎌の刃を研ぐのは、草を刈るためだ。のこぎりの目をよく立てれば、世の中に切れない木はなく、鎌の刃をよく研げば、世の中に刈れない草はない。

だから、のこぎりの目をよく立てれば、世の中の木は切れたも同然で、鎌の刃をよく研げば、世の中の草は刈れたも同然だ。秤があれば世の中の物の軽重はみな分かるし、枴があれば世の中の物の数量はみな分かる。だから世の中の借財は完済できたも同然なのだ。それはこの分度の確立が富国の基本であるからだ。

40. 与えられた機会を無駄に費やさないこと（〔一五一〕 分外の結構を分内に入れるな）

大人人々が成功をして、すぐその後失敗するのは、与えられた機会を当たり前のことにして、その機会を有り難いことと思わずに土台にして踏みつけていくからだ。初めの心構えがこうだから、末は千里の違になることは必然なのだ。人々の財産も同様であって、分度すなわち自分の通常の収入額をよくわきまえていて、予定外の収入が入ってきても、それを蓄えておけば、臨時のもの入りや不慮の出費などに差し支えが出ることはないものだ。また商売の道でも、予定外の利益を別に分けて取っておけば、予定外の損失が出ることもないはずだ。予定外の損がでるのは予定外の利益を予定内の利益と一緒にしてしまい消費してしまうからだ。

私の仕法が分度を定めることを大本とするのはこういう理由からなのだ。分度が一旦決まれば、生み出された余剰を自他へ譲り施す

第5章 推譲は繁栄連鎖を復活させる（幸福を永遠にする推譲の法則）

41. 利を貪れば、上下ともに減じる（〔一六三〕 四海困窮せば天禄永く終わる）

大体、手元に入ってくるものは、元々自分から出て行ったものが戻ってくるのだ。手元に来るものは、自分が推し譲ったものが入ってくるものなのだ。たとえば農民が田畑のために精をだして、肥やしをかけたり干いwashをやったり、作物のために力を尽せば、秋になって収穫がかならず多いことは言うまでもない。ところが、種を蒔いて、芽が出たとたんに芽を摘み、枝が出たとたんに枝を切り、穂が出たとたんに穂を摘み、実がなりかけたたとんに実を取れば、決して収穫はない。商売もこれと同じで、自分の利欲だけをもっぱら考えて買い手のためを思わず、むやみに利益をむさぼっていけば、その店はすぐに衰微するだろう。

古語(書経)に、「人心これ危く道心これ微かなり。これ精これ一、まことにその中をとれ。四海困窮せば天禄永らく終わらん。」とある。これは舜(しゆん)帝から禹(う)帝へ、天下を授受する時の心構えだ。

上として下から取り上げることが多く、下が困窮すれば、上の恵みも長い間終わりとなると言っているが、終わるのではなく、天から賜ったものを、天に取り上げられるのだ。この道理は明白なのだ。「人心これ危く道心これ微かなり」とは身勝手にすることは危ないものだぞ、他人のためにすることは嫌になるものだぞ、と言うことだ。「これ精これ一、まことにその中をとれ」とは、よく精力を尽くして、一心堅固に、二百石の者は百石で暮らし、百石の者は五十石で暮し、その半分を推し譲って、一村の衰えないよう、一村がますます富み栄えるように勉励せよ、と言うことだ。「四海困窮せば天禄永らく終わらん」とは、一村が困窮するときは、田畑をどれほど持っていたても、決して作徳は取れぬようになるものだぞ、ということと心得ればよい。帝王の話だからこそ、四海といい天禄といったのであって、そなたたちのためには、四海を一村と読み、天禄は作徳(作得; 田畑の収穫)と読むがよい。

42. むさぼらないだけでは譲とは言えない（〔一六四〕 奪と不貪(ふどん)と譲）

むやみに欲張らないということだけでは、決して「譲」ということにはならない。悪いとは言えないが、もう一段上にあがらなければ国家・社会の用をなさない。国家の役に立たなければ天の恩・国の恩に報いる方法がないではないか。そこで、勤労・儉約によって貯蓄し、田畑を買い求め、財産を増やしなが、天から与えられた使命のあることを知らず、人間の道に志すこともなく、あくまでも利益を増やすことを願い求め、そうして自分の衣食住だけに費やすならば、それはとるに足らない徳(徳)のない人間であって、その志は「奪」にあるのだ。そうでなくて、勤労・儉約によって貯蓄し、田畑を買い求め、財産を増やすところまでは同じだけでも、そこで自分には天から授かった使命があることをよく悟り、人間の道に志して譲道を行い、土地を開拓したり改良したりして人々を助ける。ここまで来て初めて譲道を行うと言えるのだし、そうして初めて国家の役にも立ち、天のめぐみに報いることにもなるのだ。むさぼらないだけの不貪者を、どうして譲者と言うことができよう。

43. 譲りの道を行わなければ安堵の地は得られず（〔一六八〕 人道の根本は譲道）

虎や豹などは無論のこと、熊や猪などを見てみると、木を倒したり、根を掘ったり、その強いことは例えようもないが、またその労力も例えようがない。しかも終身苦勞して安堵の地を得られないのは、譲ることを知らず、生涯己のためばかりしているから、勞して功がないのだ。たとい人と生まれても、譲りの道を知らなかったり、知っても勤めなかったりでは、安堵の地を得られないのは鳥獸と同じことだ。だから、人たるものは、知恵はなくとも、力は弱くとも、今年のを来年に譲り、子孫に譲り、他人に譲るという道をよく心得て、よく実行しさえすれば、必ず成功すること疑いない。

44. 推譲の段階（〔一七一〕 推譲の段階）

譲ということは人道であって、今日のを明日に譲り、今年のを来年に譲る道を勤めない者は、人であっても人でないのだ。十銭とって十銭つかい、二十銭とって二十銭つかい、宵越しの銭を持たぬなどというのは、鳥獣の道であって人道ではない。鳥獣には今日のを明日に譲り、今年のを来年に譲るという道がないが、人はこれとちがって、今日のを明日に譲り、今年のを来年に譲り、その上子孫に譲り、他人に譲る道がある。雇い人となって給金をとって、その半分を使って半分を将来のために譲り、あるいは田畑を買ったり家や蔵を立てるのは、子孫へ譲ることになるのだ。これは世間で人々が知らず知らず行っていることで、これでもちゃんと譲道なのだ。だから一石の者が五斗を譲るのも、実行できないことではないだろう。なぜかといえば、自分のための譲りだからだ。この譲りは教えがなくてもできやすいが、これより上の譲りは教えによらなければできにくい。これより上の譲りとは何かといえば、親類・友人のために譲ることだ。郷里のために譲ることだ。なおできにくいのは国家のために譲ることだ。この譲りでも、しょせんは自分の富貴を維持する結果となるのだけれども、眼前、他に譲ることだから難しいのだ。

この道を勤めるものは富貴や栄誉が集まって来るし、この道を勤めない者は富貴や栄誉がみんな遠ざかってゆく。少し行えば少し集まり、大いに行えば大いに帰する。

世の中の富有者に教えたいのはこの譲道だが、ただ富者ばかりのことではない、また金や穀物ばかりの譲りではない。道も譲らなければならぬ。あぜも譲らなければならぬ。言葉も譲らなければならぬ。功績も譲らなければならぬ。

45. 奪うに益なく譲るに益あり（〔一七二〕 湯ぶねの教訓）

人間の手は、自分の方へ向いて、自分のために便利にもできているが、また向こうの方へも向いて、向こうへ押せるようにもできている。これが人道の元なのだ。鳥獣の手はこれと違って、ただ自分の方へ向いて、自分に便利なようにしかできていない。だからして、人と生まれたからには、他人のために推す道がある。それをわが身の方に手を向けて、自分のために取ることばかり一生懸命で、先の方に手を向けて他人のために推すことを忘れていたのでは、人であって人ではない。つまり鳥獣と同じことだ。なんと恥ずかしいことではないか。恥ずかしいばかりでなく、天理に従わないことだからついには滅亡する。奪うに益なく譲るに益あり、譲るに益あり奪うに益なし。これが天理なのだ。

46. 無尽蔵を開く大道（〔一七三〕 無尽蔵を開く大道）

世の中では、とかく増えた減ったということについて騒がしいことが多いけれども、世間で増減とっているものは、たとえば水を入れた器があちらこちらに傾くようなもので、あちらに増せばこちらが減り、こちらに増せばあちらが減るだけで、水そのものには増減がありはしない。あちらで田地を買って喜ばば、こちらで田地を売って嘆く者があり、あちらとこちらの違いがあるだけで、本来増減はない。ところが、わが道で尊ぶ増殖の道はこれと違って、天然自然が万物を作り育てることに直接参加する正しい道であって、米五合でも麦一升でも芋一株でも、天つ神が積んで置かれる無尽蔵の恵みの中から、くわ・かまの鍵でもってこの世の中に取り出す正しい道なのだ。これが真の増殖の道というべきものであって、尊ばなければならず、努めなければならぬ。

47. 万事、刃先を手前にせよ（〔一七四〕 万事、刃先を手前にせよ）

世の中で刃物をやり取りするのに、刃の方を自分に向け、柄の方を先方に向けて出しているが、これが道德の本意なのだ。刃先を手前にして先方に向けないのは、万一間違いがあったときに、わが身には傷がついても、ひとに傷をつけまいという気持なのだ。だから、万事そのような心掛けで、自分の身上には損をしても、ひとの身上には損はかけまい、自分の名誉はそこねても、他人の名誉には傷をつけまいという精神ならば、道德の本体は完全だといえよう。それから先はこの心を押し広めるだけだ。

48. 相手を理解し道理にかなった対応をすること（〔一七五〕 馬は飼葉桶で治まる）

馬が厩(うまや)から放れて邸内を駆け回っていた。人々が大いに騒ぎ立てていると、馬丁が出てきて、静かに静かにといって、飼葉桶をたたいて小声で呼んだところ、さしも荒々しくはねまわっていた馬が急に静まって、おとなしく飼葉についた。——そなたたち、よく心得るがよい。世の中は何も難しいことは決してない。犬も、来い来いというばかりでは来ないが、時々食い物をやって呼べばすぐに来る。なすもなれなれといってなるものではない。肥しをすれば必ずなる。猫の背中でも、毛並みになでれば知らぬふりをして眠るし、逆さになでると一ぺんで爪を出す。私が桜町を治めるにも、この道理にのっとって、勤めて怠らなかつただけなのだ。

49. 今日の豊かさは前代の人々の推譲による（〔一七七〕 現代の文化は前代の推譲）

大体にして人の功労は、心と体との二つの苦勞によってできあがるもので、努力してあきらめない時は必ず天の助けがある。これを勤めこれを勤めてあきらめなければ、やはり天がこれを助けるはずだ。世間で、心も身も尽して私心のない者が必ず成功するのはこのためだ。今の世の中に勲功が残って世界に役立つもの、人から称賛されているものは、みなことごとく前代の人骨折りのものだ。今日このように国家が富栄盛大なのは、みんな前代の知徳の優れた人々が残したたまものであり、前代の人々の骨折りのものだ。骨を折れよ、諸君。勉勵せねばならないぞ、諸君。

第3部 尊徳仕法の実際(人の巻 報徳の仕法)

第6章 国家盛衰の根元

50. 衰亡は利権の争奪から（〔一七八〕 衰亡は利権の争奪から）

国民がおのおのの利を争うことがはなはだしくなると国家は衰亡し始める。豊かな者たちは満足するということを知らないし、世の中を救おうという気持も持っていない。望むものを手に入れても、更にもっと手に入れたいと願い、自分勝手なことばかりを画策し、天の恩も知らず、国の恩も感じない。貧乏人は貧乏人で、何とかして自分の利益を獲得しようとするが、特に知恵もないから、納めるべき税金を滞納させたり、借金を返さなかつたりしている。このようにして貧富ともども正義も義務も忘れて、できもしないような悪知恵ばかりを画策して利を争っているが、その見込みが外れたら、破産という苦しい境遇の大河に沈むのだ。この大きな河も、覚悟して入る時は、おぼれて死ぬまでには至らないから、また浮かび上がることも向こう岸に泳ぎ着くこともあり得るが、覚悟がなくてこの河に陥った者は、二度と浮かび上がることができずに一生を終わることになるのだ。哀れなことだ。私の教えは、世間一般のこのような悪弊を除いて、安楽の地を得させるのを役目としている。

51. 真の利益は利の少ない所にあり（〔一七九〕 真の利益は利の少ないところに）

天下国家の本当の利益というものは、最も利益の少ない所にあるものだ。一見利益が多いように見えるものには、必ず本当の利益はないものだ。家のため、仕事のために利益のある事業を始め

ようとするときは、よく思慮を尽した方がよい。

52. 変事に備えること（〔一八三〕 変事に備える道）

世の中が無事に治まっても、災害というような、変事がないとは限らない。これが第一に用心しなければならないことだ。変事が仮にあったとしても、これを補う道が準備されていれば、変事がなかったも同然になるが、変事があってこれを補うことができなかった場合は、それこそ大変なことになる。古語(礼記)に「三年の蓄えなければ国にあらず」と言っている。外敵が来たとき、兵隊だけあっても、武器や軍用金の準備がなければどうしようもない。国ばかりでなく、家でも同じことで、万事ゆとりがなければ、必ず支障ができて、家が立ちゆかなくなる。国家天下ならなおさらのことだ。人は私の教えのことを、むやみに儉約ばかりさせるというが、むやみに儉約するのではない。変事に備えるためなのだ。また私のやり方のことを貯蓄ばかりさせるというが、貯蓄が目的なのではない、世を救い。世を開くことが目的なのだ。

53. 気風の刷新は率先巡回から（〔一八八〕 民風作興は率先回村から）

怠惰な気風が蔓延し、悪い風習に染まりきっている村の気風を刷新するのは、非常に難しいことだ。どうしてかといえば、法で戒めても守らない、命令をしても行わない、教えを施しても聞こうとしない。そういう連中なのだから、家業に精励させる、頭を義に向けさせるといっても、実に難しいことなのだ。私が昔桜町陣屋に来たところが、配下の村々は、怠惰のきわみ、汚風のきわみで、何ともしようがない。そこで私は、深夜とか、あるいは未明に、村里を巡回することにした。なまけ者を叱るのではない、朝寝を戒めるのでもない。良いとか悪いとか、勤勉とか怠惰とか、一切いうことを避けて、ただ自分の勤めとして巡回を続けて、寒くても暑くても、雨風のときでも休まなかった。そうして一二月もたつと、ようやく足音を聞いて驚く者がでてくる。足跡を見て不思議に思う者がでてくる。また、まともに出会う者もある。それから村民同志の間に戒め合う気持や、うかうかしてはおられぬぞという気持が生じて、数ヶ月のうちに、夜遊び・ばくち・けんかなどはもちろん、夫婦の間にも小百姓の間にも、いさかい合う声が聞かれないようになった。

54. 怠惰な民も人口の減少も失政から（〔一八九〕 惰民も人口減も失政から）

大体にして田畑が荒れるのは怠け者の農民のせいだと言い、人口が減るのは産んだ子を育てられずに殺す、悪習のせいだというのが普通の議論だが、どんな愚民だと言っても、わざと田畑を荒らして自ら困窮を招くはずはないだろう。また鳥や獣ではあるまいし、親子の情がないはずがないだろう。それなのに産んだ子を育てないのは、食物が乏しくて、育てきれないためなのだ。その本当の気持を察してやれば、哀れといって、これほど哀れなことはない。その元はといえば、重い課税に耐えられぬために田畑を捨てて作らないことと、民政が行き届かぬために堤防や用排水や道・橋が壊れて、耕作困難になることと、ばくちが盛んに行われて風俗が退廃し、まともな民心が失せ果てて耕作しなくなること、この三つだ。こうして耕作しないから食物が減少する。食物が減少するから人口が減少するのだ。食があれば民が集まり、食がなければ民は散ってしまう。

本当に、重んずべきものは人民の米びつだ。

55. 賄賂の悪弊（〔一九〇〕 賄賂の悪弊）

大昔は、人と交際をし、互いに信頼関係を結ぶためには、十分に心を尽し、体もあれこれと動かして、交わりを結んだものだ。それは金銀貨幣が少なかったからだ。後世、金銀の通用が盛んになって、交際の音信贈答にすべて金銀を用いるから、やりとりが自在で、きわめて便利になった。それから賄賂ということが起ったのであって、礼儀だからとか、よしみを通ずるとかいいながら、ついに賄賂をするようになった。そのために正邪も明らかにならなくなる。法も正しく行われなくなる。約

束が守られなくなり、義務が果たされなくなり、賄賂が盛んに行われる。こうして万事賄賂でなければ用が済まないほどになった。私が始めて桜町に来たとき、土地の悪賢い連中が争って私に賄賂をしてきた。私が一切受け付けなかったから、それから善悪・正邪がはっきりしてきて、信義誠実の者が初めて表に出るようになった。とにかく、最も恐るべきものはこの賄賂なのだ。

第7章 治国の要道

56. 金だけでは復興はできない（〔一九七〕 衰村復興は幹部の徳行から）

村里の衰廃を興すには、金を投じなければ人がついてこない。金を投ずるのに方法があって、受ける者がその恩に感じなければ益がないのだ。広い天下のことで、金を出す善人も少なくない。それでいて、墮落した風俗を洗い流し、すたれた村を興すところまで行かないのは、みんなその方法が当を得ないためだ。だいたい村長とか、主だって何かやろうという者は、必ずその村の富者なのだ。仮にそれが善人で、よく施したとしても、自分が驕奢・ぜいたくでいるものだから、受ける者が恩を恩とも思わずに、そのぜいたくをうらやんで、おのれの驕奢をやめない。自分の分限を忘れた過ちを改めない。だから無益なのだ。それだから、村長の任にある者は、自らへりくだって身を慎み、富を誇らずぜいたくをせず、慎んで分限を守って、余財を押し譲る。そうして村の害を除く、村の益を起す、困窮者を助ける。そうすれば村民はみんなその誠意に感じて、ぜいたくしたい気分も富貴をうらやむ気分も、救いを求める気分も消え去って、勤労をいとわず、粗衣粗食をいとわず、分限を越していた過ちを恥じて、分限の内で暮らすのを楽しむようになる。こういうふうにしなければ、廃れた村を興し、くずれた風俗を改めるところまでゆかないのだ。

57. 無駄に放置・費やされているものを生かす（〔一九八〕 人の捨てざるなきもの）

世の中には人が捨ててはいないが、捨てたも同然のものが至って多いのです。数え切れぬくらいあります。第一に荒地。第二に借金の雑費と暇つぶし。第三に金持ちの驕奢。第四に貧乏人の怠惰などがそれです。たとえば荒地などは、捨てたようなものようですが、開墾しようとするとき必ず持ち主が出てきて、容易に手をつけられないものです。つまり、捨てたも同然ではあるが、完全に捨ててはいないものなのです。また、借金の利息や、借り替え・済（な）し替えに要する雑費なども同じ類で、捨てるのではないが、やはり無いようなものです。そのほか、富者の驕奢の費え、貧者の怠惰の費え、みんな同じです。世の中にはこのように、捨てるのではなくて無に属するものが、いくらもあるでしょう。

これをよく拾い集めて国家を興す財源としたならば、あまねく国民を救ってなお余りがあるはずで、この、「捨ててはいないが無いも同然のもの」を拾い集めるのは、私が幼年のころから努めてきた方法で、それがために今日までやってこられたわけです。すなわちこれが、私の仕法金（改革が生み出したお金）の根源なのです。よく心を配って拾い集めて、世を救うべきだと思います。

58. まず心の荒廃を直すことから（〔二〇一〕 まず心田の荒蕪を開く）

荒蕪には幾つかの種類がある。まず、田畑の荒れたもの、これは国家としての荒地だ。借財が多くて稼ぎ高を利息にとられ、稼ぎ高はあってもないのと同然のものがある。これは国家のためには生きた土地で、その人のためには荒地だ。また、土地がやせた粗田で、公租と村費だけの収穫はあるが、耕作者に利益のない田畑がある。これはお上のためには生きた土地で、下の者には荒地だ。また身体強壯なのに遊惰に日を送る者がある。これは自他のために荒蕪だ。また資産もあり財力もありながら国家のためになることをせず、いたずらに驕奢にふけて財宝を費やすのがある。これは世の中で大きな荒蕪だ。なおまた、知恵も才能もあるのに遊芸を事として、琴三味線や碁将棋・書画などをもてあそんで、世のためを思わずに生涯を送るものもある。これも世の中の荒蕪だ。こ

れら数種の荒蕪は、その元は心田の荒蕪から発するものだから、私の勤める道はまず心田の荒蕪を開くの先務としなければならない。心田の荒蕪を開いてのち田畑の荒蕪に及んで、この数種の荒蕪を開いて熟田としたならば、国の富強は手のひらをめぐらすように容易であろう。

59. 平常心を保って事にあたること〔二〇二〕安んじて後慮(おもんばかり)

「安んじて而(しか)してのちよく慮り、慮りて而してのちよく得(大学)」とあるが、まことにその通りだろう。つまり心を安らかにした後、問題についてよく思慮を巡らせば、良い結果が得られるだろうと言うことだ。だいたい世間の人は、苦しまぎれにいろいろのことを考えたり企てたりするから、みんな成功しないのだ。まず安心立命をして、それからよく慮って事をすれば、過ちはないはずだ。

60. 数理によって道理を悟ること〔二〇三〕仕法雛形は一切経

この興復法(日光仕法雛形)の計算は、単に日光だけのことではない、国家興復の計算なのだ。この帳簿はただの計算帳と思ってはいけぬ。みんな一々悟道であって、天地自然の理をしるしたものだ。およそ天地は、昼夜正しく変満して、違いがなく、偽りがなく、偽りがなく偽りがなくのは算術もそうだから、そこでこの算術をかりて、世界が変満するのはこういう道理だから、決して油断はできぬぞと示して戒めたのだ。

この仕法帳を開いて、初めの一の数字を何になりと定めてみるがよい。善なり、邪なり、悪なり、正なり、直なり、曲なり、何なりと定めておいて見てゆけば、元によって利が生れ、利が返ってまた元となり、その元にまた利がつき、繰りかえし繰りかえして、仏説にいう因果因果と引き続いて絶えないこと、年々歳々この通りだ。

たとえば毎朝自分が先に目を覚まして人を起こすか、あるいは人に毎朝起こされるか、この一例でも分かるだろう。人生は一刻勤めれば一刻だけ、一時(とき)働けば一時だけ、半日励めば半日だけ、善悪・邪正・曲直みんなこの計算のように違ってくる。一厘違えば一厘だけ、五厘違えば五厘だけ、多ければ多しだけ、少なければ少しだけ、この通りの結果になると、百八十年間明細に調べ上げてあるのだ。朝早く起きた因縁によって麦が多く取れ、麦が多く取れた因縁によって田を多く作り、田を多く作った因縁によって馬を買い、馬を買い求めた因縁によって田畑がよくでき、田畑がよくできた因縁によって田がふえ、田がふえた因縁によって金を貸し、金を貸した因縁によって利息がとれる。年々このようになってゆくからして富有者になるのだ。富有者が貧困になってゆくのも、これと同じ道理だ。

野原の草や山林の木の生長もまた同じ道理で、春伸びた力によって秋根を張り、秋根を張った力によって春伸び、去年伸びた力によってことし太り、今年太った力によって来年太るのだ。天地間の万物はみんなこの通りだが、これを理論でいうとすると種々の異論があつて面倒だから、私は算術をかりて示したのだ。算術で示すときは、どんな悟道者でも、どんな理論家でも一言もない。天地開びやくの昔、人も鳥獣もまだなかった時から、違いのないものを持ってきて証拠として、天地間の道理はこういうものだぞと知らせるようにしたのだ。

決してこの仕法帳を計算と見てはならない。数というものはごまかしのきかないものだ。この数理によって道理を悟るがよい。これが悟道の近道なのだ。

61. 善行表彰と無利息金貸付による村の復興〔二〇四〕善行表彰と無利息金貸付

村里の復興にあたっては正直者・働き者を引き立てることが肝心である。しかし善人はとかく表に出たがらないものだからこちらから引き出すように努力をしなければならない。同様に、田畑の開拓には肥えた土を投入する必要があるが、肥えた土は必ず低いくぼ地にあり、掘り出さなければ表に出ないものである。これを見逃すことは、村里の復興において大きな損となる

村里の復興には善人を引き立て、**出精者を表彰**した方がよい。この表彰には、投票によって、耕

作出精で品行も心掛けも良い者を選んで、**無利息金の巡回貸付法**を行うのがよい。この方法は、たとえば米をうすでつくようなもので、きねはただうすの真ん中をつくだけだが、うすの中の米は一律に白くなる。これと同じ道理で、返済さえ滞らなければ、社中一同が知らず知らずに自然と富み、充実してくる。ところが返済が滞るとすると、これはうすの米がくるくる返らないのと同じようなもので、仕法の大きな障害になる。うすの米が返らなければむらづきになって、一部の米だけが折れて碎けるものだ。この仕法で返済が滞れば、仕法がしぼんで振るわなくなるものだ。貸付を取り扱うときによくよく注意して説き聞かせるがよい。

62. 自力更生の覚悟が道を開く（〔二〇五〕復興は開びやくの大道によれ）

論語に、「信なればすなわち民任ず」とある。つまり信頼関係があれば下々の民はお上にその一身を委ねるものだという事だ。子は母親に対しては、自分がどれほど大切と思うものでも、疑わずに預けるものだ。これは母親の信が子に通じているからだ。私と小田原の先君（大久保忠真公）との間もこれと同じだった。私への桜町仕法の委任は、「心組みの次第一々申し立つるに及ばず、年々の出納計算するに及ばず、十箇年の間任せ置くものなり」ということであつた。それゆえ私は一身をゆだねて桜町に来たのだ。

（自力更生の覚悟）

さてこの桜町に来て、どうしたらよいかと熟考したところ、日本国が開かれたその昔、外国から資本を借りて開いたのではない、日本は日本自身の努力で開いたに違いないことに気づいた。そこで小田原藩の交付金も謝絶し、近郷の金持にも借用を頼まず、この四千石の土地の外は海外だと見なして、自分が古代の昔にこの地へ降り立ったのだと決心をした。そうして日本は日本の努力で開く道こそ先人の足跡であると思ひ定めて、一途に古来から続くまとうな方法によって努力したのだ。そもそも国が開かれたその昔、この地に一人で降り立ったものと覚悟すれば、川の流れてみそぎをしたように、この上なくさっぱりする。何事をするにもこの覚悟を決めさえすれば、依頼心も起こらない。卑怯卑劣の気持もない。何を見てもうらやましいことはない。そして心中清浄だから、願うことで成就しないものはない。そういう境地に達するのだ。この覚悟が、事をする場合の大本であつて、私の悟道の極意なのだ。この覚悟が定まれば、衰えた村を立て直すことも、つぶれた家を興すことも、いともやさしい。ただこの覚悟一つだけだ。

63. 世話をやきすぎるな、自立を促せ（〔二一九〕仕法も世話をやきすぎるな）

大体、ものごとには適切な度合いということがある。飯を炊くにも料理をするにも、みんな良いほど加減が肝要なのだ。

私の仕法でも同じことで、世話をやかないと実行されないということはもちろんだが、世話もああだ、こうだとやき過ぎると、やはり人に嫌われて、当人はどうしたらいいか分からないから、まず放っておこう、などというようになるものだ。古人の句に、「咲きすぎて見るさえ嫌し梅の花」とあるが、うまいことをいったもので、何事でも、過ぎたのは及ばないより劣る。心得ねばならないことだ。

64. 無利息金の妙用（〔二二三〕無利息金の妙用）

現今の困った問題は、村が困窮疲弊しており、人の気持が萎えていることだ。これを直そうとするには、困窮から救うことが必要だ。その困窮を救うために、財を施しつ放しにしたのでは、いくら財があつても足りないものだ。そこで私は無利息金貸付の方法を考え出した。この方法はそれこそ「恵んで費えず」という方法だ。またこの方法に、一年分の謝礼金⁽¹⁾をつける法を設けた。これは恵んで費えぬほかに「欲して貪(むさぼ)らず」という法だ。たとえば復興を果たすのに十両のお金と十年間の期間が必要な場合、十両のお金を無利子で十年賦で貸し与え、毎年一両ずつ返済してもらい、年々復興の実りを蓄えながら十年後に完全に復興できたら、その一両返済をもう一年続けてもらい

それを報徳金として納めていただく。この報徳金は、再び他の困窮者のための貸付金として使われるのだ。実に貸借両者にとって両全の方法といえるだろう。

(注1. 謝礼金 元恕(げんじょ)金・冥加(みよが)金という。当時の利率は年二割は普通であるから。無利息五カ年賦ならば利息分だけで完済となる。そこでもう一年払ったつもりでお礼をし、報徳金に加えるのである。)

65. 飢民救助の実施方法 ([二三三] 飢民救助の実施方法 天保の大飢饉)

私が烏山その他に施行した飢饉の救助方法は次の通りだった。

まず村々に言い聞かせて、飢渴に迫った者を区分けして、老人とか幼少とか病身などで力仕事ができない者や、婦女子でその日の働きが十分にできない者を残らず取り調べさせて、寺院とか大きな家を借り受けてここに集める。そして男女ごとに三十人、四十人ずつ一組にし、ひと所に世話人一二名を置いて、一人につき一日に白米一合ずつと定める。四十人ならば一度に一升の白米に、水をたくさん入れてかゆに炊き、塩を入れて、これを四十椀に甲乙なく平等に盛って一椀ずつ与える。また一度は、量は同様だが菜を少しまぜて、みそを入れて薄い雑炊にして、前同様に盛って一椀ずつ与える。こうして代わる代わる、朝から夕まで、一日に四度ずつと定めて与えるのだ。だから一度に二勺五才の米を、かゆの湯にしたものだ。そうしてこれを与えるときに、ていねいに言い聞かせる。

「お前たちの飢渴はさぞかしと察している。実に気の毒なことだ。今与える一椀のかゆの湯も、一日に四度と限りがあるから、さぞ空腹に耐えかねるだろう。けれども、大勢の飢えた人に十分に与えるべき米麦が天下にないのだ。この少しばかりのかゆでは飢えをしのぐに足りないだろうし、実に忍びかねるだろうが、今日は国内に米穀の売り物がなく、金銀があっても米を買うことができない世の中なのだ。しかるに領主の殿様が、ばく大の御仁恵で倉をお開きになり、お救い下さるところの米のかゆがこれだ。一椀でも容易なことではない、厚くありがたく心得て、ゆめゆめ不足に思っではいけない。また世間では草根木皮などを食わせることもあるが、これははなはだ良くない。病気が出て助からないで、死ぬ者が多い。実に危ないこと、恐ろしいことだ。だから世話人に隠して草根木皮などを、決して少しでも食ってははいけない。

この一椀のかゆの湯は、一日に四度ずつ時を定めて、ちゃんと与えるのだ。だからして、仮に体はやせても、決して餓死する心配はない。また白米のかゆだから、決して病気になる恐れもない。新麦の熟するまでの間のことだから、何としてでもよく空腹をこらえて、起き伏しも動作を静かにして、なるたけ腹の減らないようにして、命さえ続けばそれでありがたいと覚悟して、よく空腹をこらえて、新麦の豊熟を天地に祈りながら、寝たければ寝るがよし起きたければ起きるがよし、毎日何をするにも及ばない、ただ腹のへらぬように動作して、空腹をこらえることを仕事と心得て、日々を送るがよい。新麦さえ実れば十分に食わせよう。それまでの間は、死にさえしなければありがたいと、よくよく覚悟して、返すがえすも草木の葉や皮を食べてはいけない。草木の葉や皮は、毒がないものでも腹に慣れないものだから、たくさん、それも毎日食べていると、自然と毒のないものも毒になって、そのために病気を生じ、大切な命を失うことがある。決して食べてはいけない。」

と、丁寧な言い聞かせて、空腹に慣れさせ、無病でいさせることこそ、救窮の上策であろう。だから必ずこの方法に従って、一日一合の米を与えて、草木の皮や葉などは食えともいわず、食わせもしないのだ。

66. 烏山の救急仕法 ([二三四] 烏山の救急仕法 天保の大飢饉)

天保七年に、烏山侯の依頼によって領内に施行したあらましをいえば、まず一村一村に言い聞かせて、極難の者のうち、力仕事ができる者とできない者と二つに分けて、力仕事のできぬ老幼・病身の者など千有余人を、烏山城下の天性寺の講堂や物置、その他の寺院のほか、新たに小屋二十棟を建てて収容して、一人に白米一合ずつ、前にいった方法で、その年の十二月一日から翌年

の五月五日まで給与した。そして飢民の気晴らしのために藩士の武術のけいこをそこで行わせて、縦覧を許したり、折々は空砲を鳴らしたりして、減った気分を消散させた。そのうち病気になった者は、自宅に帰すか、別に病室を設けて療養させた。そして五月五日の解散の時には、一人につき白米三升、銭五百文を渡して帰宅させた。一方、力仕事のできる達者な者には、くわを一枚ずつ渡してやって、荒地一反歩について起こし返し料三分二朱、仕付料二分二朱、あわせて一両二分と、ほかに肥し代一分を村に渡して、一村全体から出精者で仕事の中心になれるような者を投票で選ばせ、高札の者にその世話役を申しつけて、荒地を起こし返して飢えつけさせた。

この起し歸しの田地が、ひと春の間に五十八町九反歩も、植付までできた。実に天から降ったよう、地からわいたように、数十日のうちに荒地が変じて水田となり、秋になってその実りは、直ちに貧民の食料の補いになったのだ。そのほか、くつ・わらじ・なわなどを作った量もばく大なもので、餓死する者が一人も出ずに安穩に取り続き、領主の殿様の仁政を感佩(かんぱい 深く心に感じて忘れないこと)して農事に勉強したものだ。まことに喜ばしいことではないか。

67. 救急と勸業の法 ([二三五] 救急と勸業の法 天保の大飢饉)

烏山藩で行った救急仕法は、ただ急場を救うだけの良法ではなく、産業を勧めるためにも良法なのだ。この法を施すというと、一時の困窮が救われるばかりでなく、遊惰の者を自然に勉強に仕向けて、思わず知らず職業を習い覚えさせる。習い性となつては弱い者も強くなるし、愚かな者も職業に慣れるし、幼い者もなわをなうことを覚え、わらじを作ることを覚え、そのほか種々のかせぎを覚えて、遊んで徒食する者がなくなる。そして人々は遊んでいることが恥ずかしく、徒食することが恥ずかしくなつて、おのおの精業におもむくようになってくるのだ。

恵んで費えない方法(無利息金貸付法など)は、困窮を救うための良法であるが、烏山藩で行った救急仕法はこれに倍した良法といってよい。飢饉凶歳でなくても、困窮を救う志がある者は、深くこれに注目せねばならない。世間で困窮者を救おうという者が、みだりに金や穀物を施し与えるのは、はなはだ良くないことだ。なぜかといえば、人民を怠惰に導くからだ。これはつまり恵んで費えることになる。だからして、恵んで費えないように注意して施行し、人民が奮発して勉強におもむくようにさせることが肝要なのだ。

68. 天保飢饉の予知と対策 ([二三八] 天保飢饉の予知と対策 天保の大飢饉)

天保四年と七年と、二度の飢饉のうち、七年が最もひどかった。早春から引き続き季候が不順で、梅雨から土用まで降り続き、気温も非常に寒冷で、じめじめした雨が曇天ばかり。晴れた日はまるで、晴れたかと思えば曇り、曇ったかと思えば雨が降った。

私は土用の前からこれを心配して気をつけていたが、土用にさしかかると空の気色が何となく秋めいて、草木に触れる風も何となく秋風めいてきた。折から、新なすがよそから到来したのを、ぬかみそにつけて食ったところが、自然と秋なすの味がした。

これでもって決心して、その夕方から飢饉の用意に心を配り、人々をさととしてその用意をさせるとともに、その夜は一晚中手紙を書いて諸方に使いを出して、飢饉の用意一途に力を尽した。その方法はというと、明き地・空地はもちろん、木綿の生い立った畑もつぶし、荒地・廢地も起こして、そば・大根・かぶ・菜・にんじんなどを十分にまきつけさせる。あわ・ひえ・大豆などすべて食料になるようなものの耕作培養に、細かく丹精を尽させる。また穀物の売り物があるときは、どの品に限らずみんな買い入れる。そのため、すでに借入れの抵当もなくなって、貸金の証文を抵当に入れて金を借用したものだ。この飢饉の用意を諸方に通知したうちで、厚く信用してよく実行したのは谷田部・茂木の領村だった。通知を受け取ると、その使いと同道で郡奉行自身が馬にむち打って来て、方法をたずねて急いで帰る。そして郡奉行や代官役などが属官を率いて村里に臨んで、懇々と説諭して、まず木綿畑をつぶし、荒地廢地を起こし返して、食料になるそば・大根をまかせたという。

69. 飢饉時の余穀推譲 ([二三九] 飢饉時の余穀推譲 天保の大飢饉)

天保七年の十二月、桜町陣屋の支配下四千石の村々に触れを出して、一軒ごとに所持している米麦・雑穀の俵数を取り調べさせて、こういった。「米はもちろん、大麦・小麦、大豆・小豆、何でも一人につき俵数で五俵ずつの割合で、銘々蓄えておき、それ以上持っている俵数は、勝手次第に売り出すがよい。この節ほど穀物の値が高いことは二度とあるまい。まさに売るべき時はこの時だ。すみやかに売って金にするがよい。金がいらなければ、相当の利息で預かってやろう。その上、当節売り出すことは、平年にただで施すよりも功德があるのだ。どこえなりと売り出すがよい。一人五俵の割に足りない者の分、たくわえのない者の分は、当方で確かに準備しておくから安心するがよい。決して隠して置くに及ばない。詳細に取り調べて届け出よ。」—こういって、四千石の村々の、毎戸の余分は売り出させ、不足の分は郷蔵に積み囲っておいて、その残りは漸次倉を開いて、みんな烏山領をはじめ他領他村に送り出して救助した。このように、よその困窮を救うには、まず自分の支配の村々が安心するように方法を立てて、それから他領に及ぼすがよい。

70. 駿東郡の救急と小田原藩 ([二四〇] 駿東郡の救急と小田原藩 天保の大飢饉)

駿州駿東郡は、富士山のふもとで雪どけ水で灌漑する土地がらのため、天保七年の凶荒は特にはなはだしかった。領主の小田原侯は、この救助法を江戸で二宮翁に命ぜられ、米や金の支出は家老大久保某に申しつけてあるから、小田原に行って受け取るがよい、と指示された。二宮翁は即刻出発して、夜行で小田原に到着され、米と金を請求されたところ、家老や年寄の評議がまだ決まらず、翁は長時間待たされた。ちょうど昼になったので、一同は弁当を食べてから評議しようということになった。そこで翁は、「飢民は今や死に迫っているのに、これを救うべき評議がまだ決まらない。しかるに弁当を先にしてこの至急の評議を後にするのは、公議をあとに、私事を先にするものである。今日のことは、平常のことと違って、数万の民命に関する重大な案件である。まずこの議事を決して、それから弁当を食われるがよい。この議事が決まらなければ、たとえ夜に入っても弁当は用いなさるな。つつしんでこの議をお願いする」と述べられたので、もつものこととて、列座の者は弁当を食うことをやめてこの議事についた。そして、すみやかに用米の蔵を開くべしと決まって、この趣を倉奉行に達した。ところが倉奉行がまた、倉を開く定日は月に六回である、定日のほかみだりに倉を開く例はないといって、開かない。そこで又大いに議論があったが、家老の列座で弁当うんぬんの論があったことを聞いて、早速倉を開いたという。

71. 御厨郷の救急仕法 ([二四一] 御厨郷の救急仕法 天保の大飢饉)

駿州御厨郷(御殿場市一円)の飢民扶育を扱っているうちに、米も金もすでに尽きて手段がなくなった。そこで郷中にこのように言い聞かせた。「昨年の不作は六十年間にまれなものだったけれども、平生農業に出精して米麦を余している心掛のよい者は、さしつかえることはあるまい。いま飢えている者は、平生から惰農で、米麦の取りかたも少なく、遊樂を好みばくちを好み、飲食にふけていた、放蕩無頼の心掛のよくない者だから、飢えるのは天罰だといってよい。それでは救わなくてもよさそうに思えるが、こじきをしている者を見るがよい、無頼の悪行がもっとひどくて、ついに住みかを離れてこじきをしているのだから、憎むべききわみだ。しかし、それさえも哀れんで、一文の銭を施したり、一握りの米麦を施すのが、世間の通り相場なのだ。今日の飢民はこれと違って、もともと一つの村の同じ所に生れて、同じ水を飲み同じ風に吹かれ、吉凶葬祭には互いに助け合ってきた、因縁の浅からぬ者なのだから、見捨てて救わない道理がどこにあらうか。私は今この飢民のために、無利子十カ年賦の金を貸与して救おうと思う。けれども、飢えに臨むほどの者は困窮がひどいから、返納はきっとできないだろう。そこで来年から、食うにさしつかえなくて救いを受けない者も、毎日こじきに施すと思って、銭十文とか二十文を出すがよい。それ以下の、中・下の者は、銭七文な

り五文なり出すがよい。来年豊作ならば天下は豊かだろうから、御厨郷だけがこじきに施さなくても、国中のこじきが飢えることはあるまい。こじきに施す米や銭で、飢えた村人の返納を補ってやれば、自分の損はなくて飢民を救うこととなる。これが両全の道ではないか」——こう言い聞かせたところ、郡中の者は一同感服して承諾した。そこで役所から無利子金を十カ年賦で貸し渡して、大いに救助することができた。つまり上に一文の損もなくて、下に一人の餓死者も出ず、安穩に飢饉を免れることができたのだ。このとき小田原領内だけで、救助した人員を村々から書きあげたところ、四万三百九十余人であった。

72. 救急の決意と食料準備 ([二四二] 救急の決意と食料準備 天保の大飢饉)

私は不幸にして十四歳のとき父に死に別れ、十八歳のおりに母にも死に別れ、所有の田地は洪水のため残らず流失してしまったから、若年のころの困窮患難は実に心魂に徹し、骨髓にしみついで、今日でもなお忘れることができない。そこで何とかして世の中を救い、国を富まし、憂き瀬に沈む者を助けたく思っただけで、はからずも天保の二度の飢饉に遭遇した。そこで心を砕き、身を粉にして、広くこの飢饉を救おうと努めたのだ。

その方法は、ことしは天候が悪い、凶作だろうと思い定めた日から、一同申し合わせて非常の勤儉を行い、堅く飲酒を禁じて(+)、断然百事をなげうって用意をした。その順序は、まず申し合わせて、明き地空地を開き、木綿畑をつぶして、ジャガタ芋・そば・菜種・大根・かぶなど、食料になるものをまきつける手配りを尽す。土用あけまでは隠元豆も遅くないから、おくての種を求めて沢山まかせる。それからわせを刈り取って、乾田は耕して麦をまき、金銭を惜しまずに元肥を入れて培養する。それから畑の菜種の苗を田に移し植える。こうして食料の補いとしたのだ。このように、その土地土地で油断なく努力すれば、意外に食料が得られるはずだ。凶荒のきざしがあつたら、油断なく食料を求める工夫を尽くさねばならぬ。

(1) 桜町陣屋で禁酒を励行し、豊田・小路・小嶋などの酒豪の禁酒積立金が四十一両に達した記録がある。

あとがき

報徳学は実行学です。それゆえ普通の学とちがって、道理に基づいた実行をすることを尊んで、実際的な道理を究明し、それを実行し体験し、天地の恩恵に報いる努力をし、そこに人々の安心立命の地を得る教えなのです。

その、天地の恩恵に報いるための勤めは、内面的には天賦の良心を養成することと、外に向かつては天地自然が万物を育成することを助けて成就すること、この二つです。概していえば道徳と経済です。人間の安心立命を得るために、道徳をもってその基本的な考え方とし、経済をもってそれを実現するための手段とし、この二つをまごころ(至誠)の一つで貫くのを道とします。

この道は高遠でなくて平易です。空理ではなく実地ですから、知るにも行うにも困難はありません。それを世人は考え違いして、知るにも行うにも難しく、高遠深長で容易にうかがい知れず、常人に及びもつかないようなものが至道だと思っています。そうして、知りやすく行いやすく、中正で平易なものが、かえって万世不易、天下至極の大道であることを知らないで、いたずらに高尚にばかり走っています。それを先師が嘆かれて立てられた道ですから、少しも難しいことはありません。この道に入るには道というものが高遠なところではなく卑近なところにあることを知ればいいでしょう。至道は卑近にあることが分かれば、実徳実行の尊いことが分かります。実徳実行の尊いことがよくわかれば、この道の半分以上は理解できたのと同じでしょう。